

寝室に移り、佐藤の指示でベッドにバスタオルを敷き、横たわる。浴室での触れ合いで真砂美の体は火照っており、あそこも熱くなっている。すぐに指を入れられても痛くないだろう。

真砂美のスマホを録画モードにして位置を決めると、佐藤はマッサージ用のオイルを手にとった。挿入することが決まっているので、自身も浴室からそのまま、全裸で来ている。

「真砂美さん、これから全身をほぐしていきますから、少しでもいやだと感じることはあれば、必ず教えてくださいね」

「はい……ドキドキします」

「うん、いっぱいドキドキして、ますますきれいになりましたよ」

佐藤は女性を触るのも、褒めるのもうまい。肩から始まり、ゆっくりと首筋、耳の後ろへと指を這わせ、言葉でも愛撫していく。

「ここ、耳の後ろ感じるんですよね？キスしてあげたいくらいかわいい耳だ」

「ん……」

形のよいDカップの胸は、乳首がツンと勃ち上がっている。二人の子を産んだとは思

えないスタイルの良さは、真砂美のひそかな自慢だった。でも、その体を浩はこの二年、触ってくれない。帰ってもこない。だから、浮気をするんじゃないやなくて性感マッサージを利用する。わたしは悪くない……真砂美は、徐々に全身を愛撫する佐藤の手に夢中になりながら、自分に言い訳をしていた。

「あ、はあはあ……はあん」

「色っぽい声、たくさん聞かせてくださいね。音声もきちんと拾っていますから」

そうだ、録画しているんだ。夫ではない男に触らせて、感じているのを。真砂美はスマホのカメラの方を見た。撮られている。ああ、後で何度も自分で見て、オナニーしよう。そのためにも今、たくさん、いやらしいことをしてもらおう。

脇腹、へその周り、と下りていった手が、割れ目の少し上を輪を描くようになぞる、

「あん、はあはあ……」

カメラを意識して、声が高くなる。佐藤の手は、太ももを外側から撫で回し、だんだんと内側へ移っていった。

「真砂美さんの好きなこと、たっぷり触っていきますね」

「ああ……」

気持ちいい。外側よりも敏感なそこから、膝の裏へと、何度も指が往復する。まだ乳首にも割れ目の中にも触れられていないのに、愛液がどくどくと奥から出てきているのが分かる。

「真砂美さん、どんどんエッチな顔になってきてる……きれいだ」

いやらしい言葉にも反応して、また愛液が出てくる。性欲をかき立てる佐藤の言葉と手つきが、嬉しくてたまらない。

「あん……もつとエッチにして、わたしのこと……はあはあ」

「いいですよ……楽しみましょうね」

「あんっ」

佐藤は、真砂美の片方の乳首をピンツと指で弾いた。反応を見ながら、二度、三度と繰り返す。もう片方の乳首は、強く引つ張られている。

「あっ、ああんっ」

「ふふ……真砂美さん、Mっ気あるよね」

佐藤の口調が、馴れ馴れしいものへと変わっていく。それも、佐藤の言うところの真砂美のM性を刺激する。

「そんな、あっあんあんっ」

「こっちも見せてもらうよ」

泣きたいほど気持ちよくなり、もっと、と言っているのかどうか迷いはじめた頃、がばっと開脚させられた。何の前触れもなく、抵抗する間もない。明るい部屋の中、佐藤はじっと、ぱっくりと割れた真砂美のそこを見つめている。

「あ、恥ずかしい……」

思わず顔をそむけ、指先を噛む。

「恥ずかしいと、ますます感じるんじゃないかな。そういう体だ。ああ、きれいなオマシコだ」

「や、言わないでえ」

腰をくねらせ、懇願する。無駄なことは分かっていた。それに、もっと言ってほしいのが本心だった。

そんなことは佐藤には見透かされている。足首をつかまれ、太ももをねっとりとなめられていく。もう片方の手は、割れ目のまわりをたどっている。

「どこもかしこも、びしょびしょ、ぐしょぐしょだ。いやらしいなあ、奥さん」

奥さん、という聞き飽きた呼び方も、今は興奮材料になる。夫でもない若い男に、股を開かれ、全部見られているのだ。

「あん、あん……焦らさないでえ」

「焦らさないと、おねだりしてもらえないからね。どうしてほしい？」

佐藤は割れ目から手を遠ざけていく。今度は脚をM字開脚の形にさせられ、スマホのカメラをそのすぐそばに置かれた。

「撮りながらしてあげるから。でも、してほしいことは自分で言うんだよ？」

恥ずかしさに涙がにじんできてるが、もっと快感がほしいし、自分のいやらしい姿を動画に残したい。佐藤に暴かれた自分のその欲を、もう抑えることはできなかった。

「触ってえ……オマンコ触ってください」

「うん、いいよ」

佐藤の指が、愛液を絡めとる。

「すごいな。ほら、こんなだよ」

愛液が糸を引いている指を見せつけられる。恥ずかしさに声も出せずにいると、佐藤はその自分の指をゆっくりとしやぶった。

「やあ……」

「ああ、真砂美さんの味がする。エッチな味だなあ」

羞恥でどうしていいかわからずにいる真砂美を、佐藤はいとおしそうに眺めた。それから、両手の指で、ぐい、と割れ目を押し広げた。

「あっ……」

「クリトリスもこんなに大きくして。いけないお母さんだなあ。子供たちが学校で勉強している間に、男を家に入れてこんなことして」

「ちろちろと、突起を舌で刺激される。佐藤の言葉責めにも反応して、愛液が溢れ出す。

「はあん、あん、あん」

「うわ、溢れてくるね。すごいな……おいしい、素敵だよ真砂美」

「あふうん、はふうん……」

名前を呼び捨てにされ、部屋にはぴちやぴちやと淫靡な音が流れ始めている。チャットでは、真砂美が欲望に素直になると「変態」と敬遠されたり、好みでないハードなSMを提案されたりするが、今はそんな心配はない。佐藤は、真砂美の希望どおりのプレイで気持ち良くさせてくれるのだ。佐藤の舌が、割れ目に差し込まれていく。

「あああん、気持ちいい……気持ちいい」

どれだけよがってもいい、揶揄する者などいない。こんなにいやらしいわたしを見て、受け入れて。真砂美は自身の腰を佐藤の顔に押しつけるように、ぐいぐいと動かした。

「ふふふ、かわいいね。もっと見せてごらん、真砂美の本当の姿を」

佐藤の指が、無遠慮に割れ目に差し込まれる。中を執拗にこすられ、クリトリスを舌で舐られる。

「ああん、あああんっ」

「真砂美、自分で胸を揉んでごらん。もっと気持ち良くなれるよ」

「は、い」

真砂美はもう佐藤の言いなりだった。両手で大きな乳房を持ち上げ、揺すり、佐藤にその様を見せつける。驚掴みにして揉みくちやにしたり、乳首を摘まんんだり、乳輪をなぞったり。もっと、もっといやらしくなれば、佐藤はもっと褒めてくれるだろう。

「ああん、見て、見てえ」

「見てるよ。真砂美のきれいでいやらしい恰好を、全部見てるよ」

「嬉しい……あんあんっ」

佐藤の指は、二本、三本と増やされ、じゅぼじゅぼと卑猥な音を立てながら出たり入ったりしている。気持ち良すぎておかしくなりそうだ。クリトリスを強く吸われ、指で中の方を引っ掻くように刺激され、ついに真砂美は達した。

「あん、いく、いくうっ、いっちやうう……」

「いって、いくところを見せて。全部録画しようね」

「あ、ああああ……!!!」

体を仰け反らせ、大きく息を吐く間にも、佐藤の愛撫は止まらない。執拗に指を突き立て、肥大したクリトリスをしゃぶり、その音を聞かせる。快感のあまり逃げようとする腰を抱き寄せ、真砂美の手に自身の怒張を握らせる。

「はあはあ、あ、大きい……」

「うん、ここからは仕事じゃない。真砂美のためだけの時間だよ」